34 テーマ別 家族と社会

標準問題

▲△▲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈佐賀〉

認知症で家族の記憶をすっかりなくしたマユの祖母（バーバ・はなちゃん）は、老人ホームに入ってから食事をほとんど受け付けなくなってしまった。ある日、母とともに祖母のもとを訪れたマユは、祖母が窓の外の富士山を指さしたのを見て、以前、家族で一緒に食べたかき氷を祖母が食べたがっているのだと思い、かき氷を買いに急いで自転車を走らせた。

夏休みで連休のせいか、車がかなり渋滞している。私は、臨機応変に歩道と車道を交互に走った。ぐんぐんと富士山が迫ってくる。急がなきゃ、急がなきゃ、気がつくと、猛スピードで走っていた。体が、風の一部になってしまいそうだった。

何かアクシデントが起きても不思議じゃなかったけど、何も起きずにかき氷の店まで辿り着く。でも、やっぱりここも、ものすごい人だかりだ。店の前に、長い行列ができている。どうしたら良いのだろう。このまま待っていたら、夜になってしまうかもしれない。私は、一心に店の奥へと突き進んだ。

この店では、天然氷というのを使っている。冬、プールのような所に水を貯めて自然の力で凍らせ、それを切り出して保管し、かき氷にするのだ。私は今でも普通の氷との違いがよくわからないけれど、パパはその氷の味をえらく褒めていた。この氷でウィスキーの水割り作ったら、うまいだろうなぁ、とか何とか言って。でも、今はそんな感傷に浸っている場合ではない。一秒でも早くバーバにかき氷を届けなければ……。

店の庭では、みんなうれしそうにかき氷を頬張っている。①あの時も向日葵が満開だった。確かに数年前、私達はこのままいつまでも同じメンバーでいることに、何の疑いももたず、ここでかき氷を口に含んだのだ。

「すみません」

勇気を振り絞り、窓の所で四角い氷を機械で削っているおじさんに声をかけた。でも、周りが騒がしくて聞こえなかったのか、無視されてしまう。

「すみません！」

二度目は、声を強くした。ようやくおじさんが、できたての氷の山に透明なシロップをかけながら私の方を見てくれる。けれど、その先の言葉が繋がらない。私はみるみる泣きたくなった。ただ、バーバにかき氷を食べさせたいだけなのに。どうしてこんなに悲しくなってしまうのだろう。けれど、早く言え、と何かが私の背中を強い力で前に押してくれたのだ。

「バーバが、いえ祖母が、もうすぐ死にそうなんです。それで最後に、ここのかき氷を食べたいって」

ぐっとくちびるを噛みしめ、涙の落下を食い止める。②一瞬、音という音が世界から消えた。どうしてそんなことを口走ったのか、自分でもよくわからなかった。ママとの会話でも、ずっと気をつけて避けて通ってきた、一文字の単語。それが口をついて出たことに、自分でも驚いてしまう。

「ちょっと待ってて」

子供の言葉など相手にしてくれないかと懸念していたのに、おじさんはぶっきらぼうにそう言うと、またくるくると機械のレバーを回し始めた。目の前のカップに、白い氷の山ができていく。私は、ポケットから小銭を取り出した。かき氷一杯は買える。おじさんは、氷の小山の上から、透明なシロップをうやうやしくかけた。それを、クーラーボックスの中に入れてくれる。

「ありがとうございます！」

お金を払い、深々と頭を下げて、その場を立ち去った。

帰り道は、ますますスピードを上げて自転車を走らせる。クーラーボックス

出題傾向

- 一番身近な人間関係である「家族」と、さまざまな年齢や立場の人々で構成される「社会」では、どちらも人と人の関わり合いがテーマの文章が多い。
- 人間関係を押さえて、言動や情景描写からそれぞれの人物の心情を捉えよう。

の中の小さな富士山が溶け出す前に、どうしてもバーバに届けなくてはならない。

「ただいま。バーバ、富士山、持ってきたよ」

ホームに戻ると、またカーテンが閉じていて、部屋全体が*飴色に見える。クーラーボックスから、急いでかき氷を取り出した。もし全部溶けてしまっていたらと想像すると胸が潰れそうだったけれど、かき氷は、少し縮んだように見えるだけで、きちんと富士山の形を留めている。私は、ママにかき氷を手渡した。

「はーなちゃん、あーん」

ママはそう言いながら、バーバの口元に木製のスプーンを差し出す。バーバのくちびるは、うっすらと開いている。けれど、スプーンが滑り込めるほどの隙間はない。

「マユが、一人で買いに行ってくれたんですよ」

ママの瞳から、つるんと一粒の涙が落ちる。やがてバーバは、何かを言いかけるように上下のくちびるを広げると、スプーンを受け入れた。

「おいしいでしょう?」

ママの声が湿っている。二度、三度と、バーバはスプーンの上のかき氷を吸い込んだ。③そのたびに、目を閉じてうっとりとした表情を浮かべる。

私は確信する。バーバは今、数年前の夏の日、家族で行ったかき氷店のあの庭に帰っている。ごくり、と喉が鳴って、富士山の一部が、バーバの体の奥に染み込んでいく。私は窓辺に移動して、カーテンをかきわけ外を見た。富士山が、オレンジ色に光っている。すると、マユ、とママが呼ぶ。

振り向くと、ほら、バーバがマユにも食べさせたいって、と、私を手招いている。驚いたことに、バーバは自分で木のスプーンを持っている。

近づくと、私の口にかき氷を含ませてくれた。同じように、ママの口にもかき氷を含ませてくれる。ママは明らかに、私よりも年下の少女の顔に戻っていた。

「おいしいねぇ」

舌の上のかき氷は、まるで冷たい綿のようだ。さーっと溶けて、消えてなくなる。体のすみずみにまで、爽やかな風が吹き抜ける。

「眠くなってきちゃった」

そのままバーバのそばにいたら、泣いてしまいそうだったのだ。簡易ソファへ移動した。ママの前で泣くなんて、かっこ悪い。

「軽い熱中症かもしれないから、そこで少し休みなさい」

ママが、威厳たっぷりに命令する。バーバとママ、二人の世界を邪魔しないよう、横になってそっとまぶたを閉じる。

再び目を開けた時、部屋の中があまりに静かで、④胸がどきゅんと真っ二つに折れそうになった。天井が、虹色に輝いている。もしかして……。私は起き上がって一歩ずつベッドに近づいた。バーバの隣に、目をつぶったママがいる。私は、バーバの鼻先に手のひらを翳した。よかった。バーバは、生きている。

くちびるの端が光っていたので、私はそこに自分の右手の人差指を当てた。⑤そのまま口に含むと、甘い味がする。でも、さっきのかき氷のシロップの甘さじゃない。もっともっと、複雑に絡み合うような味だ。やっぱり、バーバは今この瞬間も、甘く発酵し続けているのだ。

（小川糸著「バーバのかき氷」（『あつあつを召し上がれ』所収）新潮文庫刊）

（注）飴色＝茶がかった黄色。

(1)　――線①「あの時も向日葵が満開だった。」とありますが、ここでのマユについての説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　祖母の病気が悪化していくにつれて、家族がばらばらになってしまった現状を再認識して落胆している。

イ　家族がそろっていることを当然のように思っていた数年前を思い出し、状況の変化に思いをはせている。

ウ　氷にまつわる父の発言の記憶がよみがえり、今でもその時の父の言葉には納得がいかないと思っている。

エ　険悪な関係だった家族の思い出と、現在の自分を取り巻く辛い状況を重ねて、悲しみがこみあげている。

⬅問題は次ページに続きます。

(2) ―線②「一瞬、音という音が世界から消えた。」とありますが、このときのマユの心情として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　今まで触れないようにしてきた祖母の死を強く意識した言葉が、思わずこぼれてしまったことに戸惑いと驚きを感じている。

イ　祖母が死にそうであるという自らの言葉とはうらはらに、涙を押しとどめてしまった自分の冷たさに気づき、困惑している。

ウ　かき氷の機械を回すおじさんの手が突然止まり、周囲が急に静かになったことで我に返って、穏(おだ)やかな気持ちになっている。

エ　早く祖母のもとに戻りたいのに、自分が懸命に伝えようとしている言葉がおじさんに無視され、絶望的な気分になっている。

(3) ―線③「そのたびに、目を閉じてうっとりとした表情を浮かべる。」とありますが、このときの祖母の様子を見たマユについての説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　うれしそうな祖母の様子から、悪化の一途(いっと)をたどっていた祖母の病状もこれから必ず快復に向かうはずだと思っている。

イ　ぼんやりとした祖母の表情から、祖母は過去の思い出の世界にとらわれたままの状態で生きていくのだろうと落胆している。

ウ　記憶を取り戻したように見える祖母の様子から、退院後にはかつて家族で行ったかき氷店へ皆で行こうと心を決めている。

エ　満ち足りた祖母の表情から、家族そろってかき氷を食べた幸福な場面を祖母が思い出しているに違いないと固く信じている。

(4) ―線④「胸がどきゅんと真っ二つに折れそうになった」とありますが、このときのマユの心情を三十字以内で書きなさい。

(5) ―線⑤「そのまま口に含むと、甘い味がする。」とありますが、この甘い味からマユはどのようなことを感じ取っていますか。その説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　祖母の失われた記憶は一時的に回復したが、やはり身体の衰えは確実に進んでおり、祖母の死期も間近に迫っているということ。

イ　かき氷に込められた幸せな家族の思い出を祖母と共有できたことで、祖母が今もなお自分を大切に思ってくれているということ。

ウ　記憶を失い体が衰えている祖母はただ死を待つのではなく、今も確かに生きていて、生命の輝きを失っていないのだということ。

エ　人は周囲の人々の支えがあってこそ生きられるように、祖母も身近な家族の愛情によって少しずつ快復しているのだということ。

アドバイス

家族関係を題材とした文章では、家族の病気、転校などの悩み、兄弟間のいさかいなど、家族内の問題や気持ちのすれ違いを描いたもの、あるいは、それらの問題を経て家族のきずなが深まる様子を描いたものが多い。

このような文章では、まず家族構成を押さえて、家庭の事情や、家族内の人間関係をつかむことが必要になる。場面や状況を理解したら、登場人物の言動や情景描写に着目して、心情を読み取ろう。

発展問題

▲△▲　次の文章は、農作業をしていた兼三さんが田んぼで倒れて病院に運ばれた後、中学三年生のおれ（直）が、駆けつけた健さんとともに、田んぼに横倒しになった*耕うん機を起こそうとしている場面に続くものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。　〈香川〉

耕うん機は重い車体を揺らしたが、かなり深く埋まっているために、起きあがろうとしない。何度やってもだめだった。

「くそっ。」

健さんがやけになったように、声を荒らげた。

「いまどき、耕うん機なんかで走りまわってるから、ぶっ倒れるんだよっ。」

田んぼの中に横倒しになってしまった耕うん機のことを言っているのか、仕事中に倒れた兼三さんのことを言っているのか、よくわからなかったけど、健さんの声が泣いているようで①おれは聞きかえすこともできなかった。兼三さんの容態のことがずっと気になっていた。

「どした。」

ふいに、暗闇の向こうに声がした。ゆったりとした声で、*敬二郎さだとわかった。山の畑の帰りらしかった。

事情を話すと、敬二郎さは棒きれの杖をつきながらやってきた。

「そうか…。心配だの…。」

敬二郎さは、ゆっくりうなずいた。

「この年寄りが助けになるかどうか、わからんけんど。」

ぼそぼそ言いながら、敬二郎さは杖とかついでいた袋を*畦にゆっくり置いた。袋の中から、たばねられたロープを取りだした。そろりと田んぼに入ると、水音も立てることなく足を進めて、おれたちのところへやってきた。

敬二郎さは、ほぐしたロープを慣れた手つきで耕うん機の車体にからめてしばり、その二つの端をおれと健さんにわたした。そっちとあっちだと、おれたちの立つ位置を指示して、自分はハンドルに軽く手をそえた。

「そうれ、引け…。」

静かな調子で、言った。

おれはロープを背中からまわしてにぎりしめ、力をこめて足を踏んばった。これを起こせれば、兼三さんは助かる。かってにそう決めつけて、力を振りしぼった。

しかし、力をこめると足が泥の中にずぶずぶ埋まった。足元がおぼつかなくて、転びそうになる。思うように力が出せない。田んぼに半分埋まっている耕うん機は、②なかなか立ちあがろうとしない。

（兼三さん、がんばってっ）

おれは、心の中で叫んだ。

「くっそおっ。」

健さんのうなり声が聞こえる。

おれは田んぼに倒れるくらい前のめりになって、ロープに体重をのせた。健さんも少し向こうで、必死に引っぱっている。

おれはロープを引きながら、目の端に後ろの耕うん機を見た。

敬二郎さがハンドルをにぎり、ロープの引き具合に合わせて、耕うん機の車体の向きをととのえている。

耕うん機はじわりじわりと体勢を立てなおしてきた。突きだした片側の車輪が少しずつ水面に近づいてくる。そして、もう一つ力をこめた時、ばしゃんと田んぼの泥をはねて、両輪で立ちなおった。

「よう、やった。」

敬二郎さは表情も変えずにそう言った。耕うん機からロープをはずしてたぐり寄せると、ぬれたロープから水がしたたった。敬二郎さは一歩ずつ水面に足を差すような慣れた足はこびで、泥水をはねることもなく、畦に戻った。

「どこのうちも*トラクターに替えた。」

畦の上で、敬二郎さがロープをたばねながら、ふと静かにつぶやいた。

「いまどき耕うん機で田んぼ仕事やっとるもんは、村の中でもほかにおらん。」
敬二郎さはロープを袋に入れると、ゆっくり背中にかつぎ、息を吐くようにして言った。
「ち、おれの声、聞こえたかな。」と、健さんはきまり悪そうに舌を出して、こっそりおれに目くばせした。
③「けんど、兼三も、直のおやじの大志郎も、トラクターでなく耕うん機にこだわった…。」
ふいに、敬二郎さが言った。「なんでか、わかるか?」と、闇の向こうで敬二郎さのぎょろっとした眼が、おれたちを見た。
「え?」
おれは、きょとんとした。何を言おうとしているのかわからず、敬二郎さを見た。
健さんも、首をかしげた。
「山の小さい田んぼを荒らしたくないからだ。」
敬二郎さは、言った。
おれも健さんもだまって、敬二郎さを見つめた。
「山の小さい田んぼなんぞ、作ったって一文にもならん。」
「……」
「けんど、田んぼを荒らせば、そこは山に戻る。いっぱい荒らせば、それだけ山が里へおりてくる。雑木も、やぶも、獣もおりてくる。先祖が年月かけて拓いてきた村が、あっという間に山に帰っていく。ここで生活していくために、山の田んぼを簡単に荒らすわけにいかん。」
敬二郎さは、闇のどこかをじっくり見すえるようにして、一言一言かみしめるように語った。
「山の小さい田んぼにトラクターは入れん。耕うん機でないと、ここらの棚田は耕作できん。」
敬二郎さは、静かにつづけた。「あいつらは、耕うん機買って、人の荒らした小さい田んぼまで耕した。村を守るっちゅうことを本気で考えてきた。そんだけこの村を愛しとった。」
敬二郎さは、暗闇の田んぼにひっそりと居すわっている耕うん機を、目を細めて見つめた。
「兼三にゃ、まだ生きとってもらわんならん…。」
ひとりごとのようにぼそっとつぶやくと、敬二郎さは棒きれをついて、農道を下っていった。
「やるな、敬二郎さ。」
闇の中に消えていく敬二郎さの背中を見て、健さんが言った。
「九十歳で、ああしぶくはできん。」
「え、九十…。」
おれは、驚いた。敬二郎さは、毎日*つかんたいらまで歩いて登ってきているのだ。
「この村には、しぶいおとながいっぱいいる。かなわん…。」
健さんは、真顔でつぶやいた。
④おれは黙って、うなずいた。

〈横沢彰「スウィング!」より〉

※一部省略等があります。

(注) 耕うん機＝田畑を耕す機械。　敬二郎さ＝敬二郎さん。
畦＝田と田の間に土を盛り上げて作った境界。
トラクター＝農耕機械などを引っ張る作業用自動車。　つかんたいら＝地名。

(1) ――線①「おれは聞きかえすこともできなかった」とありますが、なぜ直は健さんに聞きかえすことができなかったのですか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　泣くところを見たこともない健さんが泣いているということはよほど悲しいことなのだと思われ、今はそっとしておきたかったから。
イ　感情を高ぶらせている今の健さんに向かって何に対して怒っているのかと聞きかえしても、返事が返ってくるとは思えなかったから。

ウ　冷静さを失ってしまっている健さんの様子は気がかりだったが、今はそれよりも耕うん機を起こすことを優先すべきだと思ったから。

エ　突き放した言い方をしてはいても実際には兼三さんのことが心配でたまらないという健さんの気持ちが、自分にも伝わってきたから。

(2)　線②「(兼三さん、がんばってっ)」とありますが、直がなかなか立ちあがろうとしない耕うん機を見て、このように心の中で叫んだのはどうしてですか。文章中の言葉を使って、「……から。」に続くように、三十五字以内で書きなさい。

から。

(3)　線③「『けんど、兼三も……耕うん機にこだわった…。』」とありますが、兼三や大志郎が、トラクターでなく耕うん機にこだわったのはどうしてですか。その理由を、「耕うん機」「トラクター」という二つの言葉を使って、「……から。」に続くように、五十字以内で書きなさい。

から。

(4)　文章中には、兼三をいたわる敬二郎の気持ちが表情として表れている一文があります。その一文を文章中から抜き出し、初めの十字を書きなさい。

(5)　線④「おれは黙って、うなずいた。」とありますが、このときの直の気持ちはどのようなものだと考えられますか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　兼三さんがあれほどまでに耕うん機にこだわった理由を教えられ、大人になることは己(おのれ)の信念を守り続けることなのだと自分に言い聞かせている。

イ　兼三さんの仕事を軽視してきた自分たちを反省し、裕福でなくても自然と共生するこの山村の暮らしにこそ真の豊かさがあるのだと実感している。

ウ　兼三さんたち大人が先祖から受け継いできた村を必死で守ってきたということを知って、そんな大人たちに尊敬の念を表す健さんに共感している。

エ　兼三さんこそが頼りだという敬二郎さの切実な思いを聞き、兼三さんが退院するまでは健さんと二人でこの村を守っていこうと決意を固めている。

アドバイス

成長にともない、家庭や学校という普段の生活圏を超えて、より広い社会の人々と接する機会が増える。地域活動やボランティア活動に参加すれば、住む場所(出身地)や世代の異なる人と出会う機会が生まれたり、顔見知りだった近所の大人から対等な存在として扱われるようになったりする。そうした人々との交流や、交流を通して気づいたことが描かれた文章が出題される。

社会での出会いや交流では、初対面の人との交流で心が動かされたり、立場の異なる人から思いもよらぬ考え方や価値観を教えられたりすることも多い。主人公の心情を、言動や情景描写にも注目して捉えよう。